

5.令和3年度親切表彰 受賞者インタビュー

令和3年度親切表彰では、個人の部で16名、団体の部で5団体の皆さんが表彰されました。
その中で、新聞記事に取り上げられるなど、特に顕著な活動を行った方にインタビューを行いました。



令和3年度

親切表彰(団体の部)受賞

本立寺

おいかわ いっしん
住職 及川 一晋 さん

令和3年4月から、新型コロナウイルスワクチンの接種予約にインターネットなどが使えず、身近に手伝う人がおらずに困っている高齢者などへ、申込手続きのサポートを行ったことについて表彰されました。



——サポートを始めたきっかけを教えてください。

新型コロナウイルスのワクチン接種の予約が始まり、自分自身の両親にワクチンの接種券が届いたことがはじまりです。両親もインターネットでの予約が難しく、私が代わって予約を行いました。その後、日課の読経をしながら、ふと、「きっと他にも困っている人がいるはず」と思ったんです。すぐに寺につとめる僧侶にお寺の掲示板に張り紙をするよう指示しました。

実は本立寺は境内に入らなくてもお寺からの情報を見ただけできるよう、まちなかにも掲示板を置いているんです。そこにも同じように張ったところ、誰かが張り紙の写真を撮って、SNSで「こんな取り組みをしているお寺がある」と発信してくれて。それをきっかけに新聞社の方が取材に来られました。そこから他の新聞社、テレビ局などにも取り上げていただき、私たちの取組を皆さんに広く知っていただきました。

——どのくらいの方が来られましたか？

最終的には50人を超える方のお手伝いをしました。当初は檀家の皆さんや地域の方を想定していたのですが、SNSや報道の効果で、ほかの地域からもたくさん来られました。遠いところだと横浜市などの方からもご連絡をいただいたんですよ。



——**実際のサポートはどのように行われたのでしょうか。**

皆さんの接種券を確認しながら、希望の日時や会場を伺って、お坊さんが自分たちのスマートフォンやPCで予約を行いました。遠方の方など、お寺に来られない方には電話やファックスも使っていました。よくお話を聞いていくと、八王子市と予約方法が異なる場合も。その都度自治体のホームページなどで確認して、丁寧な対応を心がけていました。

お寺に来られた方は皆さん、予約ができずに、不安な思いを抱えている方ばかり。皆さんの不安を解消できるよう、きちんと予約完了までお手伝いしました。安心して帰られる様子を見られたり、感謝のお言葉をたくさんいただいたりして、やってよかったなと思っています。ですが、一番の成果は、今回のお手伝いがお坊さんたちの気づきにつながったこと。自分のためではなく、誰かのために行動する心、人に寄り添う心の大切さ……そんな気づきを得られたのではないかな、と思います。また、普段お寺に来られない方にもたくさん来ていただいたので、そういった皆さんとの交流も、彼らの学びのきっかけにもなったのではないのでしょうか。



3回目のワクチン接種予約のサポートも

——**さまざまな地域活動にも取組まれているとお聞きました。**

地域のコミュニティづくりに取組んだり、川口町のお寺でも住職を務めているので、川口地域の里山保全活動を行ったりしています。2年前からは、八王子市が行う子どもの居場所事業の一環として、学童に申し込んだけれど入れなかった方を対象に、社会福祉協議会と協力して本立寺で子どもたちの受け入れを行っています。メディアにも「現代版寺子屋」として取り上げられたんですよ。

お寺に対して、「入りにくい」というイメージを持つ方も多いと思います。ですが、お寺も地域の一部。地域の皆さんに親んでもらえる場所や関係を作っていくため、「お寺だからこそできること」を軸に取組んでいます。すでに新しいアイデアもいくつか浮かんでいますが、大切にしているのは30年後、50年後の子どもたちが暮らしやすいまちをめざすこと。「今が良ければいい」ではなく、未来の子どもたちのために今からできることに、これからも挑戦していきたいですね。



令和3年度
親切表彰(個人の部)受賞

秋葉台小学校2年生

のうしよう	ゆうへい	はせがわ	かいり
能生	悠平	長谷川	翔龍
さん	さん	さん	さん
つだ	たくみ	たかはし	あらた
津田	匠	高橋	新
さん	さん	さん	さん



秋葉台小学校の4名は、令和2年11月(当時小学1年生)に、車いすに乗っていた榊山美賛さんに声をかけ、手助けをしたことで表彰されました。後日、榊山さんがお礼を言いに小学校を訪ねられ、この出来事は新聞記事でも紹介されました。

— どうして声をかけてみようと思ったの？

「病院のスロープの前で止まっていて、困っていそうだなと思ったから声をかけてみた」
「よく知っている場所だったから、車いすだと登りにくいかもしれないと思って、手伝ってあげたよ」
「車いすを押したのは初めてだったけど、思ったよりとっても軽かった！」

— たくさん新聞に載っていたね。

「車いすのお手伝いをした時、名前を伝えていなかったから、お礼に来てくれてびっくりした」
「その時にもらった手袋、今日も使ってるよ！」
「家族や学校の先生も、『すごいね』って言ってくれてうれしかったな」

— 表彰状を受け取ったときのこと、覚えてるかな？

「覚えてる！表彰状をもらったのは初めてだったから、緊張した」
「ぼくも初めてだったからうれしかった。記念写真も家に飾ってあるよ！」

— ほかに、親切なことってしたことある？

「妹におやつを譲ってあげた。あとは家でお手伝いもしてるよ」
「ころんじゃった友達に、『大丈夫？』って聞いた。これも親切かな？」

— たくさん親切なことをしているんだね。

みんなは、これからどんな親切ができそうかな？

「友達に優しくしたり、家族のお手伝いをする事かな」
「電車やバスでお年寄りに席を譲ったりできると思う！」
「困っている人がいたら、助けてあげたいな」



学校には新聞記事や子ども達の行動に感銘を受けた方から送られた作品も

子どもたちに車いすを押してもらった榊山さんにお話を伺いました。

今も続く 温かな感謝の気持ち

さかきやま みさ
榊山 美賛 さん

交通事故で右半身が不自由になってから、約9か月後のことでした。子どもたちに出会ったその日は体の調子がとってもよかったので、初めて一人で車いすを出かけてみたんです。そうして意気込んで出かけたものの、想像以上に体力が落ちていることに気が付きました。病院前のスロープがなかなか登れない、そんな状態にとってもショックを受けてしまって……その時、子どもたちが声をかけてくれました。私はとにかくいっぱいいっばいいっばいで、彼らが近づいてきたことにも気が付いていなかったんです。突如後ろから小さな子どもの声が出て、私が驚いているうちに車いすを押して手伝ってくれました。スロープを登り切り、改めて彼らの姿を見ると、そこにいたのは黄色い帽子を被った小学1年生の子どもたち。その時の私には、まるで天使のように見えました。



私は少し変わった機種の子車いすに乗っているのですが、機種の新しきからまちなかで皆さんの目に留まることも多くて。そんな中、物珍しきからではなく、「困っているそうだな」と思って声をかけてくれたことがとても嬉しかったですね。今も、駅に行くについ、みんなの姿を探してしまいます。現在はコロナ禍で外出もあまりできない状況ですが、また会えたらいいな、と思っています。

私にとって、この出来事は人生における大きなターニングポイントとなりました。もしあの日、彼らに助けられていなかったら……今頃どんな風に過ごしていたかわかりません。すでに1年以上前の出来事ですが、当時の温かな感謝の気持ちがずっと続いていて、今でも応援してくれているような気持ちになるんです。今の私が前向きに、たくさんの方に挑戦できているのも、彼らのおかげ。困難にぶつかることがあっても、それを乗り越える力になってくれています。まだ小学2年生の彼らは、これからどんどん成長していきます。彼らに負けないように、そしていつか、彼らが大きなターニングポイントを迎えるとき、エールを送ってあげられるように、私も成長していきたいです。

